

個人的体験と日系ブラジル人としてのアイデンティティ

柳瀬フラヴィア智恵美

私の父は1990年に来日しました。日本の入管法が改正されて、日本の企業がブラジルで日系人をリクルートしていました。その時、ブラジルは経済状態が非常に不安定でした。誰もがより良い生活を求め日本に働きに来ていました。

私は生まれてからブラジルに住んで、ブラジルの学校に通っていました。母親もブラジルで先生として働いていたので、私は学校が終わったら、お祖母ちゃんのところに行って過ごしていました。

1997年に来日して、すぐに日本の小学校に入りました。日本語がゼロの状態です。私のクラスに外国人がなくて、一人だけだったので、ちょっと色が黒い男の子のところへ行って、「ねえねえ、助けて、助けて」とポルトガル語で言っていたら、その子がただ野球部で焼けて色が黒かっただけでブラジル人ではありませんでした。

本当に自分の居場所がなくて、毎日どうすればいいんだろうと思っていました。外国人用のクラスがあったので、そのクラスに通い始めましたが、平仮名と片仮名を教えてくれた程度でいつも生徒の出入りが激しかったため、日本語は思ったほど伸びませんでした。

家に帰ると、母親に今日何をしたのか聞かれても、「先生の写真を見た」とか「勉強した」と話していました。母親も一緒に勉

強したかったようです。ブラジルで先生をやっていた人が、日本に来て、まったく文字も読めない、何もできないという状態がすごく辛かったと思います。それで、市役所がやっていた日本語教室に通い始めました。そこで日本語を本当に楽しく覚えるようになって、また母親も一緒に勉強しようと言って、私と妹と母親で、三人で勉強をしていました。本当に学校の勉強が不十分でした。それでその日本語教室は役に立ちましたし、私は学校で学ぶべきこともそこ覚えたような気がします。

小学校は本当に辛くて、私はブラジル人で、日本語がまったく話せずに、一年ぐらいつと黙っていました。本当に何も話せない、周りを見ることしかできなかった、というのが正直ありました。言葉ではなく雰囲気で分かたりということがあったのですが、「よく髪の毛が長い、気持ち悪い」というふうに言われた時に、次の日にもう髪の毛をおかっぱにして学校に行きました。

そのあとは、「服装が嫌だ」と言われました。その服はお祖母ちゃんが作ってくれた服でした。ブラジルだと、お祖母ちゃんが作る服というのが一般的で、自分の両親が服を作ってくれたというのが自慢と言えるものでした。でも、それが気持ち悪い、嫌だ、生意気だというふうに言われて、お祖母ちゃんの服とか全部捨てました。日本の店に行って日本の服だけを買いました。

次の日は、「目がデカイ外人だ、生意気なんだよ、お前」というふうに言われて、私はどうすればいいかわかりませんでした。今は本当に笑って言えることですが、頑張って目を細めていました。その時は涙が止まらなかったんですよ。

両親にそういうことは、まったく言えませんでした。両親も毎日工場で働いて、働いて、朝はきれいな制服で工場に行くのに、帰ってくるとすごく汚くて。母親なんかも精神的に追い詰められて、ブラジルで先生をしていたのに、今は工場で働いているなんて辛かったんだろうなと思います。頑張っている両親を見ているだけで、私は何も言えませんでした。ただ両親の言っていることを聞いて、自分が学校でそういうことされているなんて一語も言わないことにしていました。

妹も大体同じようなことをされたと思います。私は妹を守ろうと思ったんですけど、やっぱり大変でした。本当に違いというもの相手が受けとめてくれなくて、友達と呼べるような人はあまりいませんでした。

でもいちばん心が痛かったのが、私の名前は「柳瀬フラヴィア智恵美」ですが、小学校から高校までは「ヤナセチェミ」という名前だけを使っていました。小学校の時は片仮名だったので、見るだけで外国人だというふうに分かるんですね。でも日本人と同じ名前を持っているのに関わらず、みんなと同じようになれないんだというふうにずっと思っていました。そして、本当に勇気を振り絞って、平仮名で名前を書こうとして、「ちえみ」と平仮名で書きました。その時、生徒がそれを見て、「これ誰」と言っ

て、「お前名前が違うんだよ」と言われました。それはクラス全員が認めていたことですし、一人だけ顔真っ赤にしても実際聞けなかつたですね。

その時はクラスに、日本に生まれたブラジル人の女の子がいましたが、その女の子でさえも、なんか私のことを、「お前、なに、日本人みたいになろうとしているの」というふうに言って、その彼女は自分を日本人だと思い込んでいて、私はどうすればいいのか悩んでいました。その時に、本当に悩んで、悩んでやっと辿り着いたのが、漢字を作ろうと決めました。柳瀬という漢字はもうお父さんに聞いて、判子があったので、判子を見て頑張ってそれ書いて、「チェミ」という漢字がないどうしようと思って、日本語教室の先生に聞いたり、小さいころに家族の人に「あなたの名前はこういう意味なんだよ」というふうに言われて、それを覚えていたので、その意味に当てはまる漢字にしました。

「柳瀬智恵美」という漢字ができて、その学校の担任に「柳瀬智恵美」と自分の名前を練習していたノートに先生に見せて、「先生これ私の名前なんだよ」と見せたら、先生がみんなに「ねえ、ねえみんな見てこれがチェミさんの名前なんだよ。見て、見て漢字になっているんだよ」というふうに言った時に、「え〜、何で漢字があるの？親がつけてくれたのじゃないと駄目じゃん」というふうに言われちゃうと、「実はあったんです」と言っていました。でも本当はただみんなと一緒にたたくて、なんで名前できえ同じ日本の名前を持っているにもかかわらずそこまで差別されなきゃいけないのだろうと思っていました。

それから日本の漢字で書かれた柳瀬智恵美と言う漢字を使っています。本当は中学に入る時、「ちゃんと片仮名で書かなければいけませんよ」と先生から言われていたのに、私はそれを無視してすべてを漢字で貫き通しました。

ブラジル人はよく転校するんですけど、私も1度しました。それは、小学校の日本語教室の先生に、「あなたには日本で未来がない」と言われたからです。その時、この先生は何を言っているのだろう、本当に、頭が真っ白になって、どうすればいいんだろうとっていました。その後、その先生が私の両親を呼んで同じことを言いました。もうその学校にもういられなくなりました。

それで両親は違うアパートを探して、家族で引っ越して、ほかの小学校に転校しました。その小学校には、そういう先生がいなかったのよかったです。前の小学校で送り迎えは禁止だと言われていたのですが、ブラジルのシステムだと送り迎えの意味は、親が子どもの面倒をしっかりと見ているということです。日本の学校で母が送り迎えをしたら説教されました。初めの小学校は本当に合わなかったの、変えてよかったですと私も今でも思っています。

中学に入った途端にブラジル人の友達ができる、私はずっと「日本人にならなきゃ、日本人にならなきゃ、みんなが本当に私のことを受け入れてくれるようにしなきゃ」と思っていたので、ブラジル人の生徒がいてすこし肩の重荷がありました。私はブラジル人ですが、どうすればいいのか本当に分かりませんでした。自分の「日本人にならなければいけない」というプレッシャー

と「ブラジル人になってもいいのか」という思いが交錯していました。とりあえず、差別などされていたことから、日本人はあまり信頼できなかつたので、ブラジル人の子たちと仲良くしていました。それで、外国人、生意気な外人だと言われつづけて、なぜか不良と言われる人たち仲良くなりました。彼らは私のことを受け入れてくれました。ほかの日本人からは「ずっと生意気な外人だ」と言われつづけて、私はどうすればいいんだろう、どうやって妹をこのことから守ってあげればいいんだろう、と毎日不安でした。ブラジル人で不良がいるのは、こうしないと彼らの存在を認めてくれないからです。

中学校二年生ぐらいになると、ブラジル人の間の日常会話では、「どこの派遣会社を使うのかどこの工場で働くのか」が話題でした。みんなの頭の中には選択肢が一つしかなかったです。工場で働くこと。私もずっと両親に、「ねえ、ねえ働かして、働かして、私も働きたい、私もブラジル人じゃん、日本にいても意味ないよ、早く働きたい、なんで私が工場で働けないんだ」と両親に言っていました。「私も周りの友人とおなじように工場で働きたい」と両親に言ったら、両親に「あなたはだめだ、あなたはみんなと違うんだ、あなたは絶対高校に入らなければいけないんだ」と言われました。私は本当に反抗して、今でもどうやってあんなふうになったんだろう、と思えるぐらい両親に反抗していました。「なんで私は自分の将来を決められないのだろう」と思っていました。しかし、両親からは「工場で働くのは、高校に入ったら認めてあげる」と言われました。そして、高校に入学しすぐ工

に、私は違うクラスに移されました。進学クラスでした。私はずっと大学までは行かないと思っていたし、成績もそこまでよくないと思っていました。私の前のクラスの先生が私を推薦して一番いい進学クラスに入ることができました。

その初日に、進学クラスの先生に呼ばれ、「あなたは派手だから馬鹿なことはするな」と言われました。確かにそれはあると思います。その時は、私はスカートが短くて、化粧もして学校に行っていました。進学クラスでとても浮いていました。その先生に、それ格好悪いと言われ、少しずつ直すようになりました。その先生は私の相談などに乗ってくれて面倒をしっかりと見てくれていました。

部活の先生と担任の先生に「大学に進学したら」と言われ、国際基督教大学 (ICU) を勧められ、ICU はどんな学校か分からないけどやってみようと思った。両親からも「あなたは大学に入りなさい」と言われていました。ブラジルの家族を見ている、先生や弁護士や会計士がいる中で、「私が工場で働けるのだろうか」というプレッシャーを感じていました。とりあえず大学に入れるように、頑張り始めました。朝は五時とか六時ぐらいに起きて、学校に行く前に勉強して、みんなよりも早く学校に行き、職員室にいる先生のところに行き、「先生勉強教えて、これ分からないんだ」と朝は職員室で勉強をして、授業が終わったらそのまま放課後も「先生よろしくね」と言って、放課後も先生と一緒に勉強をして、夜学校を出るのも遅かったです。土日最低十二時間勉強しようと思って勉強していました。夏休みも、英会話の先生が毎

日学校に来てくれて、私に勉強を教えてくれていました。本当にできることは何でもやろうと思い、お風呂に入る時間まで削っていました。ご飯を食べる時間も削って勉強して、両親には私が頑張っている姿は見せたくないと思っていたので部屋に引きこもっていました。何をしているのと言われたら、雑誌を読んでいると言っていました。両親はたぶん分かっていたと思います。

本当は辛い時も結構ありました、「でもやっぱり大学に入りたい」という気持ちになったのも、その工場で働いていた経験から「私はそうなりたくない」と正直思いました。それで大学に入りたいという気持ちが一層強くなって、頑張って、高校一年生の時に日本語検定の一級を取って、英語検定も二級を取って、ほかの英語検定もやっていたし、ブラジルの試験もやりました。本当に頑張って授業の前に一人だけ勉強していました。みんなが遊んでいた時に、私は一人で勉強をしていました。

周りの人からも工場のおじさんやおばさんからも「あなたは日本人の2~3倍は頑張らないと、日本で何もできないよ、やっつけていけないよ」と言われていました。その言葉を信じて頑張っていました。数学も高校一年生の時は、本当3点とかそれぐらいしか取れず、勉強したら98点ぐらいまで行って、自分でも驚きました。社会科の、歴史の授業も急にクラスで一位になって、先生に「柳瀬さん頑張ったね」と言われ、自分でもびっくりしていました。私のことを信じていた先生がいたからこそ、できたことだと思っています。また、進学クラスの人たちもライバルになってくれました。私の成績が上がるにつれ、「私もちえみさん

より上に行かなきゃ」とか「英語の宿題を直してよ」と言われるようになりました。私は勉強をして少しは仲間になった気がしました。

ICU のランキングを見てこんな順位が高い大学に私が入れるはずがない。私には一番下のランクの大学でも難しいと思っていました。私のレベルは違うと分かっていたが、やっぱり勉強しかありませんでした。先生に「宝くじに当たる確率だけど、あなただったらできるよ」と言われました。その時、なんでこの先生が私のことを信じているのか不思議でした。でもやってみようと思いました。先生も私だったらできると言ってくれて、両親も「やらなければ分からないでしょう」といつも言っていたので、思いきり勉強をしました。

初めてICUにオープンキャンパスに行った時は、自分の居場所だと感じました。ICU だったら、私のことを受け入れてくれるかもしれないと思いました。もっと英語を勉強したかったので、ICU が最適でした。

大学に入るためには、勉強だけじゃ駄目でした。勉強だけだと足りないと思い、スピーチコンテストもやるようになりました。スピーチコンテストでは、新聞社賞をもらって、他にもいくつか出て賞をもらって、最後には静岡県大会に優勝をしました。文化祭実行委員、部活の部長など履歴書に書けるものは何でもやりました。

以前から外国人の手伝いがしたいと思っていたので、隣の日本語教室の助手をしていました。そこで生徒さんに、あなたがポルトガル語と日本語が話せるから私たちにとっては少し楽になったと言われた時に、モチベーションが強くなりました。

ICU に入ることは非常に大変だと思い、勉強に励みました。そして、五段階中 4.7 まで成績の平均を上げることをできました。「それだったら ICU に入れるかもしれない」と先生に言われ、毎日学校に行って夏休みの作文を書いて、「何で自分がこんなにやってもできないのだろう」と感じていましたが、先生と一緒に頑張ろうと言ってくれました。

ICU に合格した時は本当に信じられなくて両親よりも先に、先生に電話して報告しました。先生達は本当に喜んでくれました。担任の先生も二次試験の時に毎日夜遅くまで学校にいて、一緒にディスカッションの練習をしてくれました。合格したのは私のことを支えてくれた先生がいたからだと思っています。また、両親の大学に行かせようという気持ちが非常に大事でした。両親が私に「高校に行け、大学に行け」と言ってくれていなかったら、私は今、一緒に工場で働いていたと思います。それが私の人生を変えてくれました。大学に入学しても自分は日本人と同じではないということは分かっていますが「やってみないと」という思いが強かったので、毎日勉強をしてみんなについていけるように努力してきました。

ある時、友達に「面白い授業があるから見てみようか」と誘われました。社会学の授業で、日本にいる外国人についての授業でした。日系人や研修生などについて先生が講義をしているときに、気づきました。私の現実はそこであって、一般の生徒が思っていることを初めて聞くことができ、「そんなことも分からないのだろうか」とフラストレーションを感じました。「皆の目

の前にあることでありながら、彼らは見ようとしていないのではないか、身近の人が彼らに話して気づかせなければ」と感じました。そして私は、「自分の経験を伝えていきたい」と思うようになりました。私は将来大学院に入学し、いつか国際機関で働いて、大学の先生になりたいと考えています。ひとりではできることが限られています、そのため「一人の百歩よりも百人の一步」という言葉を信じています。多くの人々は外国人だから、工場で働くものだという固定観念があります。私はいつかこの固定観念をなくしたいです。外国人や日本人のような、「内と外」の枠ではなく、人間である限り平等な権利を持つことが大事です。外国人にも学ぶ権利を保障し、彼らに未来が選択できるようにして欲しいと考えていま

す。今日は呼んでいただきありがとうございました。私は名古屋に友達がいまして、ブラジル人が集中しているところなので、来られて非常に嬉しく思っています。今日のシンポジウムの内容を他の人に伝えていたら、日系ブラジル人や外国人の現状理解が二倍や三倍大きなものになるのではないかなと思っています。今日は本当に素敵な機会を与えてくださって、本当にありがとうございました。

＜注＞ 第 189 回中部人類学談話会のシンポジウム「日系ブラジル人問題とは：研究者、実践者、当事者、それぞれの立場から」(共催：愛知県立大学多文化共生研究所、2008 年 9 月 19 日)での講演から。

■講演者プロフィール

柳瀬フラヴィア智恵美 (YANASE Flavia Chiemi)

日系人としてブラジルで生まれ、小学生の時に来日し、両親と静岡県に居住。小学校と中学校では、いじめに悩まされたが、一念発起し、高校、大学に進学。現在は国際基督教大学で社会学を専攻している。日系ブラジル人など、外国人に対する差別や無理解を意識するようになり、自らの経験を通して、日系ブラジル人の抱えている問題を、様々な機会に話している。将来の夢は、移民などの社会的弱者を支援することである。



『先住民族サミット』アイヌモシリ 2008』に ICU から英語通訳ボランティアとして参加。サミットに参加したハワイ先住民族の女性たちと (左端が本人)